

平成20年度  
障害科学系研究交流セミナー

特別支援教育研究センター長 藤原義博

平成19年12月に附属特別支援学校5校の将来構想案である「特別支援教育 筑波モデル (Next 50)」がまとめられ、その後、この「筑波モデル」を基に、特別支援教育の研究拠点形成を目指して本学が担うべき研究課題について検討を行う委員会が設置され、平成20年3月に審議経過報告書がまとめられた。今回のセミナーでは、これらの成果を踏まえ、「筑波大学が取り組むべき特別支援教育の課題」をテーマに、検討委員会の中心的メンバーであった障害科学系の若手教員によりパネルディスカッションを行った。

川間健之介先生には、コーディネーターとして、「筑波大学が取り組むべき特別支援教育の課題の審議経過」と、知的障害及び自立活動カリキュラムを中心とする統合キャンパス構想の概略を説明いただいた。続いて、パネリストとして米田宏樹先生から「知的障害教育におけるカリキュラムの課題」として、経験主義と系統主義の議論を踏まえ、①知識・技能の習得のための学習の前提となる生活経験の機会の提供、②知識・技能の習得の機会の提供、③習得した知識・技能の活用経験の機会の提供によって、経験と基礎学習の循環・進化による生きる力の獲得を促進することの重要性が提言された。



SEMINAR REPORT

野呂文行先生からは、「自閉症教育におけるカリキュラムの課題」として、個々の児童生徒の自閉症としての特別ニーズを把握し、個々の児童生徒の支援に必要な配慮点をアセスメントし、個別の行動支援計画を作成後に、支援ツールを活用しながら、原則として知的障害部門の授業に参加することの必要が提言された。また、早期教育部での早期の個別的・集中的支援や段階的計画的な集団統合、小学部での自閉症の困難性を標的としたカリキュラム開発、中・高等部での行動障害のある生徒への対応の検討の重要性が挙げられた。

佐島毅先生からは、「重複障害教育におけるカリキュラムの課題」として、知的水準が重度の児童生徒と、知的障害と感覚障害、知的障害と肢体不自由、あるいは三つ以上の障害を併せ有する重複障害児童生徒に対して、系統性のあるカリキュラムの重要性が提言された。また、知的障害を伴う重複障害者の教育の充実・発展のためには、重複する個々の障害教育に関わる専門性を機能的に統合することが欠かせず、人間教育の視点からの全体性・科学性を基盤とした系統性のあるカリキュラムを創造することの必要が強調された。

鄭仁豪先生からは「超早期教育とアセスメントの課題」として、医療機関との連携、養育者との協力や支援を含めた超早期・早期教育の内容・カリキュラム・指導法の確立、長期にわたる教育効果の検証、初等教育への移行システムと担当教師の育成等が提言された。また、アセスメントにおける課題として、①学校レベルの包括的アセスメントシステムと教師レベルのアセスメントシステムの確立、②家族参加によるアセスメントの実施、③アセスメント専門家の育成と多領域専門家との協働の必要性が強調された。

これらの研究実践課題の提言を受け、特別支援教育研究センター長藤原より、個々の障害特性と課題を踏まえた上で、障害を網羅する共同した実践および研究の取り組みの意義、筑波大学としての先導的教育実践発進の重要性などの指定討論を行った。

会場には、障害科学系教員や附属特別支援学校教員の他、前筑波大学教授を含めて90人以上の参加者があり、実践的課題等についての質問が出され、関心の高さを実感するセミナーとなった。

附属学校との6年間

附属学校教育局長 谷川彰英



平成15年の4月に、私は学校教育部長として大塚で勤務することになりました。当時は大学の教育組織で授業も担当しており、それこそ大変でした。まだエクспレスも開通しておらず、それこそ時間との勝負でした。その年が附属学校とのおつきあいの最初でした。

この年は、北原学長の最後の年に当たり、しかも翌16年度からは岩崎学長のもと国立大学法人が始まるという時期でありました。今考えれば法人化の準備段階から法人化に伴う組織整備に至る最も困難な時期に附属学校の監督を任されたこととなります。慣れない仕事に追われるだけで、どれだけ附属学校のために役に立てたか、心もとない6年間でした。

いくつかの試みはしました。その最初の一步は、「ポローニア」を作って内外に附属学校の実情を知らせようとしたことです。篠原吉徳先生のセンスで「ポローニア」という素晴らしい名前の機関誌が生まれ、14号まで継続されてきたことはとても嬉しいことです。出版関係でいえば、附属学校の将来構想を練るために『日本の教育を拓く—筑波大学附属学校の魅力—』（晶文社、2007）をまとめることができたことも嬉しい成果でした。さらに、平成18年度から始めた「科学の芽」賞の成果をまとめた『もっと知りたい!「科学の芽」の世界』（筑波大学出版会、2008）も優れた成果でした。附属学校の理科の先生方と大学教員の協力によって、「科学の芽」賞は継続的に行われ、年々多くの応募者数が伸びていることは特筆すべきことです。

もちろん、忘れてしまいたい記憶もあります。でも、それはそれで現実のものとして受けとめる必要がありました。業務の透明性をさらに増し、私たち同士のコミュニケーションを深めることによって、さらに明るく働きがいのある職場をつくり上げていってほしいと切に願っています。

この6年間いつも頭から離れなかったことは、附属学校をこれからどうするかでした。あちこちから「附属はどうするのか」と問われ続けてきた6年間でもありました。将来構想として「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3つの拠点構想を実現していくなかで、それぞれの学校の存在理由をアピールしていってほしいと考えます。特別支援学校の「統合キャンパス構想」はすでにプランとしてはできていますが、その具体的な実現となるとクリアすべき課題は多くあります。それは次期中期目標・中期計画に託すしかありません。

いちばん嬉しかったことは、各学校に行き、挨拶してくれる先生の数が増えたことでした。十分な仕事もできなかったのですが、それなりにここまでやってこられたのは、附属学校の先生方と指導教員、事務の皆さんのご支援があったからです。教育の世界にここまで私の意識を継続させてくれたのは附属学校教育局にかかわるすべての皆さんのおかげです。心から感謝しています。どうぞ、力を結集して伝統ある筑波大学の附属学校の未来を切り開いてください。

ありがとうございました。

Message To Education Bureau of  
the Laboratory Schools.  
— by Akihide Tanikawa



MESSAGE